

研究・調査報告書

報告書番号	担当
68	滋賀医科大学社会医学講座福祉保健医学部門
題名 (原題/訳)	
Impact of inflammation on the relationship among alcohol consumption, mortality, and cardiac events: the health, aging, and body composition study. 炎症がアルコール消費量と死亡や心血管病発症の関係に及ぼす影響	
執筆者	
Maraldi C, Volpato S, Kritchevsky SB, Cesari M, Andresen E, Leeuwenburgh C, Harris TB, Newman AB, Kanaya A, Johnson KC, Rodondi N, Pahor M.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Arch Intern Med. 2006 Jul 24;166(14):1490-7. Erratum in: Arch Intern Med. 2006 Oct 9;166(18):2026.	
キーワード	
飲酒、生存率、心血管病(冠動脈疾患や心不全)	
要旨	
<p>背景：</p> <p>飲酒による寿命の延長効果や、少量から中等量の飲酒で見られる心血管病(冠動脈疾患や心不全)の発症の減少がなぜ見られるかは明らかではない。近年の報告により、少量から中等量の飲酒に抗炎症作用があることが示唆されている。そこで飲酒と全死亡及び心疾患発症の関係を調べ、血中の抗炎症マーカーの値がこの関連を媒介、あるいは修飾するかについての検討を行った。</p> <p>方法：</p> <p>「the health, aging, and body composition study」に参加した、70～79歳の2487人を研究した。ベースライン時点で冠動脈疾患や心不全のある者は除外した。5.6年間の追跡期間中の、全死亡と心血管病(冠動脈疾患・及び心不全)の発症を調べた。ベースライン時に飲酒量と血中の炎症の指標であるインターロイキン6(IL-6)やCRPを測定した。</p> <p>結果：</p> <p>追跡中に397人が死亡、383人が心血管病を発症した。飲酒習慣がない者や、機会飲酒のみの者に比べ、1週間に1～7drink(1 drinkは約0.5合)飲んでいる者で、性・年齢・人種差を考慮した死亡率は小さく(1000人年あたり、飲酒しない者は27.4、飲酒する者は20.1)、心血管病の発症も小さかった(1000人年あたり、飲酒しない者は28.9、飲酒する者は20.8)。その他の交絡因子を調節しても、飲酒習慣がない者や機会飲酒のみの者に比べ、1週間に1～7drinkの者は、死亡する危険が有意に小さく(ハザード比0.75)、心血管病の発症する危険も有意に小さかった(ハザード比0.72)飲酒との関連を媒介する可能性のあるHDLコレステロールや糖尿病、高血圧や今回特に注目しているIL-6やCRP等の炎症マーカーを調整してもこの結果は変わらなかった。</p> <p>結論：</p> <p>少量から中等量の飲酒は、抗炎症作用と独立して、心血管病の発症や総死亡と関連することが明らかになった。</p>	